



Title	エッセイ：投稿からみえてくる「未来共生」： ジャーナル6号までを振り返って
Author(s)	今井，貴代子
Citation	未来共生学. 2019, 6, p. 152-157
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72124
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

エッセイ

投稿からみえてくる「未来共生」

ジャーナル 6 号までを振り返って

今井 貴代子

大阪大学未来共生プログラム特任助教

ジャーナル『未来共生学』は、プログラムの第一期生を迎えた2013年度に創刊され、本誌で第6号となる。毎号の『未来共生学』の特集企画や投稿原稿の掲載の可否などは、プログラム担当教員で構成される編集委員会で審議されている。わたしは、この編集委員会の事務局を担当してきた。履修生を始めとする投稿希望者からの問い合わせ先は、事務局であるわたしのメールアドレスになっている。ある日、履修生の一人から次のようなメールが送られてきた。

「2年前には、大阪で悶々ふつつとしていたのを随分遠くに感じる一方で、これまでの学びがいかにありがたいかが不思議と腑に落ちています。未来共生にいながらにして未来共生についてはほぼ書いてこなかったの、これを機に今の活動のなかで考えていることから、未来共生学の課題について書きたいと思っています。」

投稿したいという気持ちをとても嬉しく思うと同時に、時間の経過と場所の移動を経ることによって、プログラムでの経験があらたな意味を持つこともあるのだと感じた。他方で、「未来共生にいながら未来共生についてほぼ書いてこなかった」という一文を読んで、わたし自身のことに照らし合わせ、深くうなずいてしまった。未来共

生にいながら書いてきたものは何だったのだろうか。それが未来共生について書いたものでないならば、未来共生について書くとはいったいどういうことなのだろうか…等。このような問いは尽きないが、プログラムに関わる人の中にも、言葉にしなくとも漠然と似たようなことを感じている人もいるのではないかと思われる。そもそもスタート時点から、未来共生とは到達しえないものであり、走りながら考え続けるものであった。ジャーナルは、そうした未来共生および未来共生学とはいったい何かをめぐる真摯な議論をおこなう場としての役割を目指してきたのであった。

本エッセイでは、『未来共生学』1～6号に掲載された投稿原稿を取り上げ、どのような人がどのようなテーマで書いているかといった『未来共生学』の足跡のようなものをたどってみたい。「未来共生について書くとはいったいどういうことか」については到底及ばないが、6年間のジャーナルの歩みから、その輪郭だけでもつかめたらと思う。

ジャーナルは主に2つのパートで構成されている。ひとつは特集、もうひとつは投稿である。特集はまさに未来共生学の構築を目指し、主に教員で企画される。一方、投稿はプログラムにかかわる研究科に在籍する大学院生や教員等であれば、誰でも自分の意思（と大学院生の場合は指導教員の承諾）で挑戦できる。原稿の区分は5つあり、

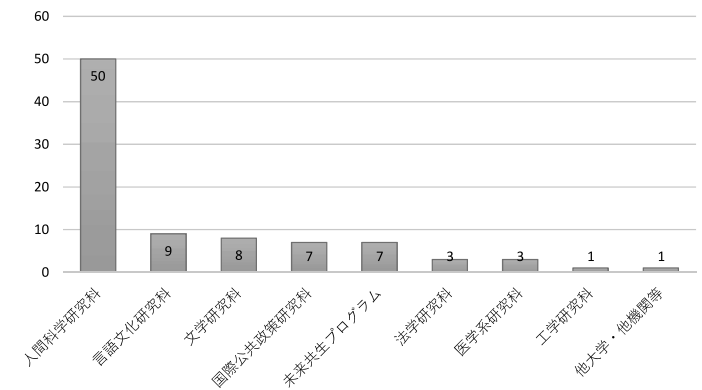


図1. 『未来共生学』投稿原稿の執筆者の内訳(所属別)

表1.『未来共生学』投稿論文等のキーワード一覧

第1号			第2号			第3号		
論文	越智 (法学)	移行期正義 刑事司法の多面的な取組み 戦争犯罪等追訴 旧ユーゴスラヴィア地域	論文	小笠原他* (医学)	国際医療 外国人診療 医療通訳 国際医療センター	論文	山本 (人間科学)	シリア難民 トルコ 学校教育 都市難民
	小林 (人間科学)	「人間の安全保障」 ポストコンフリクト UNTFHSプログラム 女性のリーダーシップ ボトムアップ		高原 (文学)	阪神・淡路大震災 災害精神医学史 PTSD 心のケア 戦争神経症		高原 (文学)	阪神・淡路大震災 復興 追悼 慰霊 風化 記憶 「しあわせ運べるように」 トラウマ 精神分析
	有江 (国際公共)	スペイン 移民 外国人 教育施策 教育法		藤高 (人間科学)	バトラー ヘーゲル 不変 具体 否定的なもの		日下部 (人間科学)	マラウイ 孤児 困難な状況にある子ども 中等教育 就学の意味
	入江 (人間科学)	犠牲者 承認 フランクフルト学派 苦悩 語り 物語		藤井 (人間科学)	贈与 平和 ソロモン諸島 「民族紛争」 ガダルカナル島北東部		木場 (言語文化)	ナラティブ分析 談話分析 アイデンティティ 性的少数者 LGBT 排除
研究ノート	脇阪* (未来共生)	在特会 ヘイトスピーチ インターネット 新聞・テレビ 憎悪と敵意 共感欠乏症	F W 報告	山本 (人間科学)	ソマリア難民 ケニア 第三国定住 援助	F W 報告	平尾* (未来共生)	世代間移動 社会的な不平等 空間自己帰帰モデル 空間的従属性 多文化共生社会
F W 報告	國政 (人間科学)	国際協力 グローバル人材育成 技術研修 環境意識 専門教育		小川 (人間科学)	ケニア 学校教育 中等教育		古川 (人間科学)	ネパール ヒマラヤ 地震 トレッキング
	柳 (工学)	バリアフリー 住居地域 生活空間 歩行環境 フィールド調査 ソウル					乾 (人間科学)	防災 避難放棄者 独居高齢者 死生観
							伊藤・西澤 (人間科学)	オルタナティブ・スクール フリースクール 多様な教育機会均等確保法 新しい「学校」

第4号			第5号			第6号		
論文	宮前 (人間科学)	障害学 介助者 障害受容 障害の透明化	論文	西 (人間科学)	教育効果研究 ウェルビーイング 効果のある学校	論文	沓掛* (東京外国語大学)	多言語主義 多言語教育 母語 アフリカ諸国 エリート
	村橋 (人間科学)	南スーダン難民 内戦 西ナイル地方 難民居住地 難民開発援助 難民の移送		伊藤 (人間科学)	教育社会学 現場への貢献 アクションリサーチ 学力		桂ノ口 (文学)	哲学プラクティス 発言 マイノリティ 不可視化
	神田* (未来共生)	アフリカ文学 英語圏アフリカ ポストコロニアリズム 多言語状況 英語圏アフリカ 多文化共生		小泉 (文学)	参加型アート コミュニティダンス 共生 身体性 政治		山本他* (未来共生)	ブラジル日本移民 日系ブラジル人 デカセギ トランスマイグラント
	井ノ口 (人間科学)	南アフリカ 初等教育 分権化		尾崎 (人間科学)	ヘゲモニックな男性性 サラリーマン 男性学		王 (言語文化)	中国にルーツを持つ高校生 取り出し授業 多言語 非言語コミュニケーション 教科学習
研究ノート	伊藤他 (人間科学)	学力格差 臨床教育社会学 言語コード	研究ノート	数中 (法学)	権利制限 著作権法第35条 教育資源 コモンズ	研究ノート	伊藤他 (人間科学・言語文化)	外国人生徒 特別扱いする学校文化 高校入学者選抜
F W 報告	西 (人間科学)	アメリカ 教育コミュニティ 小学校	F W 報告	三品 (人間科学)	児童養護施設 共同生活 夏休み		張 (国際公共)	海外育児 「We Chat ママグループ」 中国人母親 ソーシャル・サポート
	片 (人間科学)	チベット 難民 選挙 民主主義 ダライラマ					大瀧 (言語文化)	ハイチ 包摂社会 平和構築 開発政治 国際通貨基金(IMF) 「最も脆弱な人びと」

論文、研究ノート、フィールドワーク報告、書評、エッセイである。論文と研究ノートは査読対象であり、査読及び編集委員会での審議を経て、修正と再査読を何度か繰り返し、掲載に至る。残念ながら不採択という結果になったものもある。このように、ジャーナルは投稿者の「未来共生について書く」という挑戦によって成り立っている。

表2.『未来共生学』投稿論文等のキーワードに出てくる類似する語彙

	頻出／類似する語彙	原稿数	執筆者の所属
1	学校／教育	13	人間科学(10)、国際公共(1)、法学(1)、他大学等(1)
2	難民／外国人／移民	8	人間科学(5)、国際公共(1)、医学(1)、未来共生(1)
3	戦争／紛争／内戦	4	人間科学(2)、文学(1)、法学(1)
	震災／地震／防災	4	人間科学(2)、文学(2)
	援助／協力／介助	4	人間科学(4)
	言語	4	言語文化(1)、人間科学(1)、未来共生(1)、他大学等(1)
	法	4	法(2)、国際公共(1)、人間科学(1)
4	国際	2	医学(1)、人間科学(1)
	政治	2	言語文化(1)、文学(1)
	平和	2	言語文化(1)、人間科学(1)
	開発	2	言語文化(1)、人間科学(1)
	コミュニティ	2	文学(1)、人間科学(1)
	障害／バリア	2	工学(1)、人間科学(1)
	マイノリティ／少数者	2	言語文化(1)、文学(1)

その挑戦の数、1～6号までに掲載された投稿原稿の合計数は89本である。その内訳を所属別にみたのが図1である。人間科学研究科が半数を占めるのは、プログラム履修生やプログラム担当教員の所属に人間科学研究科が多いことの影響を受けているためであるが、それ以外にも、言語文化研究科、文学研究科、国際公共政策研究科など幅広く投稿されている。他大学・他機関等とは、プログラム修了生の就職した所属先である。さまざまな専門分野を横断して未来共生について論じる投稿原稿が掲載されていることがわかる。

次に、挑戦者がどのようなテーマで「未来共生について」書いてきたかを、論文、研究ノート、フィールドワーク報告に挙げられているキーワードからみてみたい。1～6号までに掲載されたキーワードを表1に示しているが、学際的なプログラムのジャーナルであるがゆえ、キーワードも多様である。そこで、キーワードの中に出てくる語彙に注目して、同じものがないか、さらにそれらの中で類似するものはないかを探ってみた。それらをカテゴリーとしてまとめて集計したのが表2である。最多は「学校／教育」で、合計13本の原稿で取り上げられている。ただし、学校／教育といっても、国内を

フィールドにしているものもあれば、海外を対象としているものもある。マクロに法・制度面において追究しようとするものもあれば、エスノグラフィーなどで文化面をミクロに描くものもある。次に多かった「難民／外国人／移民」においても、定義や対象となる国・地域は多様であり、よって立つ学問分野のアプローチ方法や研究方法等の違いによって、それぞれの原稿は非常にバラエティに富んでいる。他にも、「戦争／紛争／内戦」「震災／地震／防災」「援助／協力／介助」など、同じキーワード、似たような語彙であっても、それぞれの定義、それが指す対象、学問的アプローチ・実践的アプローチの仕方が違っていることが興味深い。しかし、その前提にあるのは、「問題」や「課題」、「難」といった「非共生」の内実を明らかにすること、そして、それらを乗り越えていこうとする、つまり「共生」を志向するという点であろう。たとえば、学校／教育は、問題や課題が目に見える形で表れやすく、集積しやすい場であると同時に、それらを乗り越えていくための実践や制度等が生み出され、人が育っていく場でもある。「非共生」と「共生」の状態はまったく隔てられたものではなく、そのリスクや可能性も含め隣り合わせにあること、せめぎあっていることを前提にして、常に「共生」を志向し続けているという点が、『未来共生学』投稿原稿の特徴としてみえてきそうである。

「非共生」と「共生」のせめぎ合う場が、学問分野を横断し、現場と学問の往還の中から、これまでジャーナルに収められてきた。今後も異なるもの同士の協働や連携によって、未来共生とは何かをめぐる議論がさらに深められていくだろうと思う。また、プログラムの修了者やプログラムを経験し次の場で活躍する人たちが今後ますます増えていく。すでに本誌にも投稿・寄稿をしてくれている。そうした人たちをつなげ、さまざまな現場との行き来や垣根を越えたつながりを生み出していく役割が、あらたにジャーナルに加わったように思われる。